

に朝勤は苦手であった。先生は硝子窓ごしに起こして廻られたものであった。

先生は無口であったが、祖師の棲神の地身延に学ぶ者の因縁の深重とその心得を繰返し教えられた。やがて寮生には二つの流れが出来た。一つの流れは先生の最も得意とされた雄弁熱が盛んになって、或者達は寺平に集って奥の院を仰ぎ、或者は塩沢の沢を見下して弁を練った。他の流れは夜中祖廟に参り唱題し祖師に直参しようとする者達とであった。

高等部三年の時私は市川大門で兵隊検査を受け酒を覚えたが、酒家の名声高かった先生から遂にお流を頂戴する機を得なかった。残念なことである。若し頂戴していれば私も先生のように飲んで飲まない奥義を会得していたかも知れない。

(立正大学教授・文博)

松木先生を追慕して

川 口 智 明

私は二十余年の永きに亘って先生と親しく接し、親子の様に慕い続けてきた一人である。松木先生の人柄は、穏和で清純温情溢ふれる方で、常に変らぬ態度で事に当たられ、学問と布教の文字通り行学二道の模範的実践を遂行せられた御生涯であったと想う。

身延に育ち、身延で生涯を終わられた先生は、戦後直ちに私の恩師深見日円法主様の前講布教師として、全国各地に法輪を転じ、「身延の松木」とまで宗門寺院信徒より慕われた方であった。随行中は車中であろうが、宿の一隅であろうが、読書と原稿用紙にペンを離された事はなかった。中でも「みのぶ誌」に、連載の「身延のお祖師様」は、「身延の松木」ならでは書く事のできぬ代表作で、真実身延と共に全生命を捧げられた先生のみだけに相通する、お祖師様と何か心の結ばれた所が見受けられる文章であった。常に邪魔にならぬ様にして側から原稿を綴られて居られる先生を横流しに見ている私は、滑べる様に走るペンの運びに、フットそんな感じを受けたことがあった。

この「身延のお祖師様」の小結に、お祖師様が此の身延のお山から東の方をお慕ひ給い、亡きお父様お母様の在りし日の懐しい御姿や、片ちがに変わり給うお墓の有様が出来して眼がしらの熱くなる事を、先生は流れるような文章で書かれ続けて、身延の本山の一隅に与えられた自分の部屋から同じ東の寺平の墓地に先生の両親が夕日に映えて、お父様だけはお顔も知らずにお祖師様が身延に御入山遊ばした、五十三歳と同じ自分を、何かの宿縁の如くに感動してお父様と呼んでも返事は頂けそうもないが、どうかこの私の拙い筆の跡だけでもお読み下さいませ。と結んでいらる。

想い返せば昭和二十三年の五月より法主様の九州御巡錫に始まり、先生は御前講、私は随行長、早川主事、学生を伴って一ヶ月先の日程は身心共に苦痛にたえぬものがあつた。今の旅行と異い、或る時は郵便車に貨物車にとそれでも車掌の心使いからの旅であつた。

何れの寺院も全堂に満ち溢れ普男善女を前にして登高座の先生は、鶯の鳴く様な響きのある静かな声で願文朗唱をされ瞑目して香爐を捧げるとともに「願我生々見諸仏……大菩提」。と朗唱されると満堂は水を打った様な静けさに

なるのであった。それより八十一歳の高齢の法主様をお援けして、新潟県下を始め、十月には長野、広島と休む暇もなく東北六県に至るまで、先生の教学部長布教部長としての実践活動は続けられた。終戦直後の荒廃した広島、長崎は未曾有の原爆の災に遇い、いち早く法主さまの御名代として先生と私は日赤病院にケロイド患者の方々をお慰ぐさめした時は、眼を掩ふような戦慄を全身に覚え、今でも眼底深く刻ざみ込まれている。その日、先生は歩き乍らこう申された。人の心は火の様なもので、毎日使わなければならぬが、火も同じ様に片時も欠く事は出来ない大切なものだが、一度此の火が燃え熾かると一瞬にして、物を灰にしてしまう。原爆もその一ツだと思ふ。心の火が悪に転じて此の様に沢山の犠牲者を出した。と首をうなだれるようにして語って居られた事を記憶している。この記事は「みのぶ誌」に「原爆の中心地を訪ふて」と題して先生と共に載せたことがあった。

昭和二十七年は宗門史上忘れる事の出来ない慶事の年であった。先生の文章中にもある通り、御祖師様の御両親は小湊妙蓮寺の境内に静かに鎮まり給うて居られるが、御師匠様の道善法師御坊は真言宗の清澄寺に……何んなに慨いて居らることだったでしょう。それが時節到来、何億の富を以て事に当らうと、聖賢の智力を如何に結集しようと不可能に近かったお祖師様の立教開宗の地、得度の聖地である千光山清澄寺が本宗に改宗して、見事この聖地で四月廿八日開宗七百年の大法要が厳修されたことである。先生は幾千年に及ぶ古刹清澄寺の慶讃文の原稿を法主さまに何度か御訂正を乞い、足らぬ文面を挿入しては、恰も、お祖師様にお仕えする日朗上人の如き至孝の一端さえも見受けられたのである。

昭和三十年六月よりは法主様の念願であった御廟備整のための最後の御巡錫であった。この年法主様は八十七歳、北海道に歩を進められた。異の外、松木先生と同じく杖とも思い心の糧とも思っていたいられた、永田大映社長を始め目

良様の御配慮になった事を、後日私に漏らされていた。その翌年まで三ヶ月老齡の法主さまは過勞の爲、私の自房に居を移され京都大学病院に先生と早川主事を伴って御入院遊ばし、全快して米寿を迎えられたが、明けて昭和三十二年二月御遷化遊ばした。其の後、私は身延駅で先生に御会いた時、お互に触れ合った眼と眼の感じは懐かしさとお瘦せになられた先生への直感であった。新校舎建設の大願の爲に、かなりの御疲勞と御心使いを感ぜざるを得なかつた。それが最後の御別れになろうとは居ても起つてもいられぬ気持ちで胸に迫る想である。

(身延山地方執事)

凡て是れ修行

秋 山 智 孝

学院の松木先生を知ったのはまだ小学校入学前の様な気がする。とするとかれこれもう四十年にもなる。知ったと云つても名前だけであつた。その頃私には何時も二、三人の学僧が居り兄弟同様の生活をしていた。彼等の間では自然と学校の話が話題に上る。学校の話に先生はつきものだから聞くともなしに先生の名前を覚えてしまう。母などは先生方のニックネームと本名を取り違えたりして笑われたりした。当時学僧達の話だと松木先生は何でも弁舌巧みで、不治の病になつたが死を覚悟して布教に専心したら不思議な事に病気が治つてしまつたと云う事で話の雰囲気